

縄文時代の人口に関する一考察

次郎丸 沢†
†株式会社 OME

キーワード：縄文時代，人口，減少理由

1 はじめに

2021年7月に北海道・北東北の縄文遺跡群（以下、本遺跡群と表記）は世界文化遺産としてUNESCOに登録された [1]。筆者は2024年7月に複数の縄文遺跡群を訪問したが、その際に縄文時代の中期から後期にかけて人口が減少しているものの、その理由が未だ解明されていないことを知った。そこで、本稿では人口減少の理由を探ることを目的とする。

2 縄文時代の諸様相

2.1 狩猟採集民の定住生活

本遺跡群は、先史時代の人々の農耕社会以前の生活の在り方と複雑な精神性を示しており、紀元前13,000年から紀元前400年の間という1万年を超える期間の中で縄文人がどのように生活を発展させていったかが分かる [2]。1950年代～60年代では定住は農耕の開始と深いかわりがあると考えられてきたが [3]、本遺跡群はその認識が誤りであったことを立証するものであり、本遺跡群以外でも狩猟採集民の定住化を推測される遺跡が世界各地で発掘されている [3]。

2.2 祭祀・儀礼の存在

本遺跡群の中にある大湯環状列石・伊勢堂岱遺跡や是川石器時代遺跡などを見ると、祭祀や儀礼に関するイベントを行っていたことが分かる。例えば、大湯環状列石には直径52mの万座、同44mの野中堂という2つの環状列石があるが、この2つの環状列石の中心を結んだ線上に日時計型組石があり、その方向は夏至の日没方向と重なっていることから、何らかの祭祀もしくは儀礼に使用していたことが推測される [4]。

3 縄文時代の人口減少に関する既存の説

縄文時代を考える上で人口から考察をすることは縄文時代研究の本質ともいえる [5]。表1にこれまでに発掘された遺跡から推定された縄文時代および弥生時代の推定人口分布を示す [6]。平均年代はC14年代データを使用し、1974年から平均何年前であるかを示している [6]。また、DNAから推定した人口でも、14500年前に人口が増加し、3,000年前に大幅に減少し、2,000年前に大幅に増加したと推定している [7]。これらの先行研究から少なくとも縄文時代の後半に人口減少があった可能性は高いと思われるが、人口減少について複数の説がある。ここではそれらを紹介するとともに、それらの説への批判を行う。

表 1: 縄文時代および弥生時代の推定人口分布 [6]

	縄文時代					弥生時代
	平均年代	-11837.5	-8130	-5157.8	-3328.8	
時期 地域	早期	前期	中期	後期	晩期	
東北	2,000	19,200	46,700	43,800	39,500	33,800
関東	9,700	42,800	95,400	51,600	7,700	100,100
北陸	400	4,200	24,600	15,700	5,100	21,000
中部	3,000	25,300	71,900	22,000	6,000	85,100
東海	2,200	5,000	13,200	7,600	6,600	55,900
近畿	300	1,700	2,800	4,400	2,100	109,400
中国	400	1,300	1,200	2,400	2,000	59,400
四国	200	400	200	2,700	500	30,500
九州	1,900	5,600	5,300	10,100	6,300	106,300
合計	20,100	105,500	261,300	160,300	75,800	601,500

3.1 気候変動が人口減少の要因であったか？

縄文後期から晩期にかけての寒冷的な気候が縄文人にとって深刻な食糧不足を招いた可能性を指摘

している [7]。しかし、関東より寒冷になる東北のほうで人口の減少割合が少ないことが表 1 から明らかである。これは少なくとも東北の縄文人が木の実などによる植物性食料への依存が高かったことが推定されており [8]、気温によって植物の選定を変更することで対応していたために東北の人口減少割合が少なかったのではないかと思われる。

3.2 ウイルスによる継続的な人口減少があったか？

東北地方の一部では気候が寒くなったのに遺跡が増えている事例があるため、気候が原因ではないウイルスによる人口減の説を提唱している研究者もいる [9]。

しかし、この説には明確な物証が無い。また、縄文土器を用いての加熱処理、とくに煮沸には消毒という効果もあるため、食中毒の予防は一定程度されていたと思われる [10]。さらに、一定数の人間が罹患すれば集団免疫が達成されるため、1000 年以上にわたって継続的にウイルスの影響があったと考えることは現実的では無いと思われる。

4 考察

ここまで縄文時代の人口について過去の議論とその批判について述べたが、どの案も縄文時代中期から晩期にかけての人口減少を十分に説明できるものでは無かった。それでは、どのような理論を用いて考えていけばよいのかについて、研究会当日の発表の場で述べることにする。

参考文献

- [1] UNESCO, “Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan,” 27 7 2021. [オンライン]. Available: <https://whc.unesco.org/en/list/1632/>.
- [2] 縄文遺跡群世界遺産事務局, “縄文遺跡群を知る,” [オンライン]. Available: <https://jomon-japan.jp/learn/jomon-prehistoric-sites-in->

jomon-japan.jp. [アクセス日: 18 8 2024].

- [3] 羽生淳子, “縄文人の定住度 (上),” *古代文化= Cultura antiqua*, 第 巻 52, 第 2, pp. 29-37, 2000.
- [4] 岩手県立博物館, 北の縄文文化回廊 in 岩手 2007, 一戸町教育委員会, 2007.
- [5] 矢野健一, “縄文時代における人口問題の重要性,” *環太平洋文明研究*, pp. 11-22, 2017.
- [6] 小山修三、杉藤重信, “縄文人口シミュレーション,” *国立民族学博物館研究報告*, 第 巻 9, 第 1, pp. 1-39, 1984.
- [7] Y. Watanabe, I. Naka, S.-S. Khor, H. Sawai, Y. Hitomi, K. Tokunaga, J. Ohashi, “Analysis of whole Y-chromosome sequences reveals the Japanese population history in the Jomon period,” *Scientific Reports*, pp. 1-18, 2019.
- [8] 淳. 羽生, “歴史生態学から見た長期的な文化変化と人為的生態システム: 縄文時代前・中期の事例から,” *第四紀研究*, pp. 54.5: 299-310, 2015.
- [9] 小林達雄, 縄文人の文化力, 新書館, 1999.
- [10] 穂. 川幡, “縄文時代の環境, その 1- 縄文人の生活と気候変動-,” *地質ニュース*, pp. 659: 11-20, 2009.